武道としての剣道のスポーツ化に関する一考察

A Consideration on the Changing from Kendo as Budo to Sports

1K10C452-1　山下 千尋
主査　吉永 武史 先生　　副査　友添 秀則 先生

【序章】

近年、中学校武道必修化が実施されたことからもわかるように、武道が改めて見直されている。これは、スポーツにはない、武道特有の教育的価値が認められたためであろう。しかし一方で、剣道は武道としてのそれから、よりスポーツ的な性格を色濃く持つものへと変わってきている傾向にある。実際、最近では武道の世界で有名になるような実力者・有段者であっても、猥褻行為や体罰などの不祥事を起こすといった事件が相次いでいる。このようなことからも、人間形成の道としての武道性の希薄化と、それに伴い発生する悪影響が危ぶまれる。このような現状を踏まえた上で、武道としての剣道がよりスポーツ的なものになっていくこと、あるいは武道から離れて完全な競技スポーツとなることによって生じる効果や問題点について検討したいと考えた。

そこで本研究では、武道とスポーツの違いを分析し、武道が持つ教育的価値について検討することを目的とする。武道のスポーツ化に伴って生じる問題について、武道の一つである剣道を題材に検討し、これからの武道としての剣道の在り方についての提言を行うこととする。

【第１章】

第１章では、武道とスポーツの違いを明らかにし、武道の特性や教育的価値について述べた。武道とは、「武技、武術などから発生した我が国固有の文化」（文部科学省 HP より）であり、心身の鍛錬を通じて人格を磨く「人間形成の道」（公益財団法人日本武道館 HP より）である。そして、身体を使いながら自分や他人、社会を知ることができる点に武道の教育的価値を見出すことができる（松原, 2013, pp. 12-13）。また、武道には常に生と死と密接に関わっていた当時の武士の生活から生まれた「残心」の存在があり、これこそがスポーツとの決定的な違いであると考えられる（ベネット, 2013, p. 30）。以上のように、武道には自国の伝統文化の尊重や心身の鍛錬による人間形成などの教育的価値が認められる。しかし一方で、学校教育という短い時間の中でその効果を実感させる難しさがあることも事実であると考える。

【第２章】

第２章では、剣道の歴史、剣道の実戦（試合）における人間形成、そして剣道から学んだことの日常生活への応用について述べた。剣道とは「剣の理法の修錬による人間形成の道」であり、剣の操法を厳しい稽古を通じて学ぶことで、剣の理法の奥にある武士の精神を学ぶことが重要とされる（全日本剣道連盟 HP より）。剣道における心法や礼法、一つひとつの動作に反映された当時の武士の生活や精神性を、剣道の修行を通じて意識的に学びとることで人間形成ができるものと考えられる。また剣道という対人競技は一種のノンバーバルコミュニケーションであるため、人との接し方、相手の出方に応じた対応、間のとり方など、日常生活におけるコミュニケーションへと応用することが可能である。このように、剣道から得た学びは、剣道の試合に限らず様々な場面で幅広く活かすことができると考える。

【第３章】

第３章では、剣道のスポーツ化に関わる諸問題について述べた。近年、武道の世界は勝利至上主義に傾き、武道のスポーツ化が進んでいる。その原因として、スポーツ推薦入試制度が挙げられる。試合にどれだけ勝ち、どれだけ成績を残したかで選手のその後の人生が決まる。そのため、勝負に勝つことが最優先課題となってしまうのである（ベネット, 2013, p. 203）。また、勝利至上主義はやがて体罰へとつながってしまう危険性もある。指導が暴力行為に逸脱しやすい原因として、日本のスポーツ・武道組織に特有の上下関係が挙げられる（ベネット, 2013, pp. 209-210）。他にも、武道は学問と異なり、頭で考えるだけでなく「身体でも考える」部分が多くを占めることも要因の一つであると考えられる（松原, 2013, p. 117）。また、今日のグローバル社会において、剣道の国際化も進行している。これは剣道の普及という面では非常に良いことだが、海外普及に伴う剣道の文化的変容は免れない。たとえば、韓国剣道界は韓国剣道 KUMDO（コムド）をオリンピック競技にする方向性を明確に打ち出している（小田・近藤, 2012, p. 133）。このように、剣道という「武道」は確実に「スポーツ化」しているといえる。しかし一方で、武道としての剣道に魅力を感じる外国人剣士も多く存在していることも事実である。彼らが武道に感じる魅力にこそ武道としての剣道の国際的普及に関する今後のヒントが隠されていると考える。